



保育連合の眞義

倉 橋 惣 三

保育連合は今やわれらの意識の上に強められている。(本號の刊行が全國保育連合大會の前に間にあうにせよ後になるにせよ)大會は、同業相集る一年一度の楽しさだけでも、充分の意義がある。その短い期日の間だけの研究討議でも大に有益である。しかも、連合の眞義は何んであろうか。われらの意識が集注せられる中心はどこにあるべきなのだろうか。ちよめていえば、連合意識の核心は何んであろうか。

先づ答える。われれが連合して、日本の幼児の保育の任務に當るといふことである。われれの個々の保育活動を連合させるといふよりも、抑々の連合保育活動の責任に出發し各自その分擔者となると共に、常に連合保育の全的意識に立つことである。

たまれ志を一つにし、業を同じくするから集るのではなくて、初めから大きな共同協力の事業の中に身を置き力をつくしてするのである。日本の幼児を正しく保育しなければならぬ、だから、そのために、われらの幼稚園、保育所があるのである。各自がその全的目的を一つの目的として、個々

の小さい幼稚園、保育所に分れて働いているのである。

幼稚園といふ、保育所といふ、公立といふ、私立といふ、それは皆、此の全目的の中に包含せられているものである。各々の人々が保育事業に入る興味や關心には個々の相違もあろう。保育事業に入つて後の立場々々も必ずしも同一でないであろう。又、其の人の個性によつて、人とは異つた自己の保育主義を執る場合もあつてよからう。しかし、これらのことは、實際的な小異小別であつて、大志は日本の幼児の保育にある。世界の幼児の保育という更に廣い志もあり、人類の幼児の保育という更に更に理想的な志もあるが、意識の具體的對象としての日本の幼児を忘れて、世界の幼児の意識も人類の幼児の意識もあり得ない。少くも、われらの共同の關心は先づ日本の幼児に向けられなければならない。但し、こゝで其の論を試みていゝのではなくて、日本の幼児の中で狭い區分意識が行われることを斥け、常に全面普通意識に徹底すべきを思うのである。

勿論、實際において、今我が當つていゝ仕事に一番強い興

味が湧き、一番深い關心がもたれる。それを留守にして、全面普通の名において漫然とした抽象的態度を執ることは許されない。それどころか、狭いなりに個々の受持ちに盡してこそ、全的のために盡せるのである。たとえは連合大會において、どんな高い論が叫ばれ、どんな大きい策が講ぜられたとしても、互がその受持ちの場に歸つて、そこに力を注ぐことがなかつたら、論は論に終り、空は空に流れ、全的のために何んの實果をも擧げないであろう。實際教育者の力は、どこまでも、現に受持つ子供を通じて顯現する。その子供達は少數であり、その場は社會の一隅であるにしても、教育の實際はそこに注がれるのである。その時の専心は他を顧るすきもゆとりもない位である。がしかし、苟もわれら教育者の志はそこに止まつてはならない。わが幼稚園、わが保育所の成績さえ擧げれば、それで事終るといふものでは決してない。微力往いて他を手傳うことはできないとしても、日本の幼児のための關心は共同であり、憂心は相互である。そこに市町の保育連合があり、府縣の保育連合があり、地區の保育連合があり、必ず全國の保育連合があらざるを得ない所以である。かくてこそそれ／＼の立場に立ちながら連合の保育をしている實態がある。自分だけでは出来ない日本の幼児の保育を共同で行つていふという心が充たされる。

幼稚園と保育所とについて、一元二元の論議がある。速に宜しきにつく必要があるが、いづれにしても、日本の幼児の保育の完成への共同である。日本の幼児の保育はどうあるべ

きかの究極を、共に共に相圖ると共に在るがまゝの段階においては、助けあわなければならぬ。理論はとにかく、今日現に兩つの施設が相携えて日本の幼児の保育をしているのである。各々その充實を念じあわずにいられない。假りにも一方的な偏見を立てたり、況んや、互におかしあつたりすることは、同じ保育者として心なき至りである。絶對の批判は客觀的に高所からのごとで、何の彼と批難しあつたりすることは、狹隘を超えて愚昧である。公立私立にはそれ／＼の在り方もあり意義もあり、何んの點においても對立性をもつものではない。設置の趣旨のあるところを互に尊重し、尊敬もしあわなくてはならぬ。私立學校法の制定も、つまりは此の趣旨の實現である。保育の義務制の主張も、日本の幼児の保育という大志からの希望に他ならない。

保育連合大會に際しての各人の心は、連合の喜びと共に連合の自覺である。連合の喜びも大きい。しかし連合の自覺なくしては、此の大會の心完しとはいえない。連合はこうして集つた結果ではなくして、われらの個々の保育活動の出發であるともいおう。そうして、集つてみてその初めのものが今更新しく蘇えるのもある。更めて強き自覺が再意識せられるのでもある。われらは日本の幼児の保育という一つの目的のために働いているのであり、そこに分擔の責任も大であるし、共同の力源も大である。大會が終つて、それ／＼の分擔に歸る時の心は、各自が此の力源に充電されてすにいないであらう。